

平成22年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

これからの時代に求められる力を育てるための、総合的な学習の教科化と必修教科の内容の見直しによる教育課程の研究開発

2 研究の概要

これからの時代に求められる力を「あらゆる場面で周囲を取り巻く状況を読み取り、自らの考えを深め、柔軟かつ創造的に問題を解決していく力」と考え、その力を育成するために、今日的な課題を学習内容とした総合教科「未来志向科」を設立する。また、必修の9教科も内容を見直し、未来志向科と相互に関連した教育課程を開発する。

具体的には、

- 未来志向科に情報、産業、環境の3つの領域を設定し、各領域に人間、自然、社会の3つの側面からアプローチした学習内容をもつ単元を開発する。
- 必修の9教科に新しい領域を設定したり、学び方を取り入れたり、新しい学習内容を取り入れたりすることで、未来志向科とつながりをもたせる。
- 必修の9教科と同じ評価の観点を未来志向科に設定することで、関連を明確にし、教科で学習した知識や技能が未来志向科で活用できるようにする。

これらがこれからの時代を拓く生徒の育成につながることを提言する。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

研究の目的

今日的な課題を学習内容とした総合教科「未来志向科」を設立し、必修の9教科と学習内容、資質・能力、学び方等につながりをもつ教育課程を構築する。そして、未来志向科を中心とした学習に取り組むことで、学んだことを生かし、自らの考えを深め、柔軟な思考をもってこれからの時代を拓くことのできる生徒の育成を目指す。

- 総合的な学習の時間を再編し、新設する総合教科「未来志向科」（以下、未来志向科とする）では、育成する資質・能力を明確にし、「情報」、「産業」、「環境」にかかわる今日的な課題を学習内容とする。また、その基礎・基本となる各教科の学習も見直し、学習内容、資質・能力、学び方、学習評価との関連を明確にする。これらのことにより、私たちの周囲を取り巻く状況を読み取る力、学んだことをもとに自分の考えを深める力、さらには柔軟かつ創造的に問題を解決していく力を育てることができる。
- 未来志向科での学習内容をふまえ、必修の9教科では、学習内容や授業時数を変更し、教科内容の見直しを行う。未来志向科では1単位時間を60分として生徒の学習活動の時間を確保するとともに、興味深い今日的な課題を用いて主に探究的な学習に取り組ませる。そうすることで、各教科において必要な意欲、好奇心、計画、方法、集中力、持続力等の学ぶ力も伸ばすことができる。

(2) 教育課程の特例

- 必修の9教科の枠を超えて、これからの時代に必要な知識や技能を身に付け、それらを生かすことができる資質・能力を育成するために、総合的な学習の時間を教科化した「未来志向科」を設立した。
- 未来志向科に今日的な課題を学習内容とした「情報」「産業」「環境」の3つの領域を設立し、学年の発達段階に応じて学習内容の系統性を重視した単元を開発した。また、それぞれの領域内に人間的側面、自然的側面、社会的側面の異なる3つの側面からアプローチした単元を設定し、主に育成する資質・能力も設定した。
- 必修の9教科については、各教科の学習指導要領の枠を超えて、新しい領域を設定したり、学習内容の追加、削除、単元の組み替えを行ったり、学び方を取り入れたりした。
- 必修の9教科の内容の見直しは、それぞれの教科の見直しの方向に応じて、授業時数も見直しを図った。教科内に新しい学習内容や学習活動を設定した教科に関しては、授業時数を増加しているが、年間指導計画を見直すことでこれまでの授業時数で実践できる教科に関しては、増加していない。
- これまでの総合的な学習の時間は、人間としての在り方生き方を求め続けようとする能力態度の育成を目指した「人間・道徳」として設定した。学習内容は人間、自然、社会の側面から構成し、教育課程上の位置付けでは「人間・道徳」とした。

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

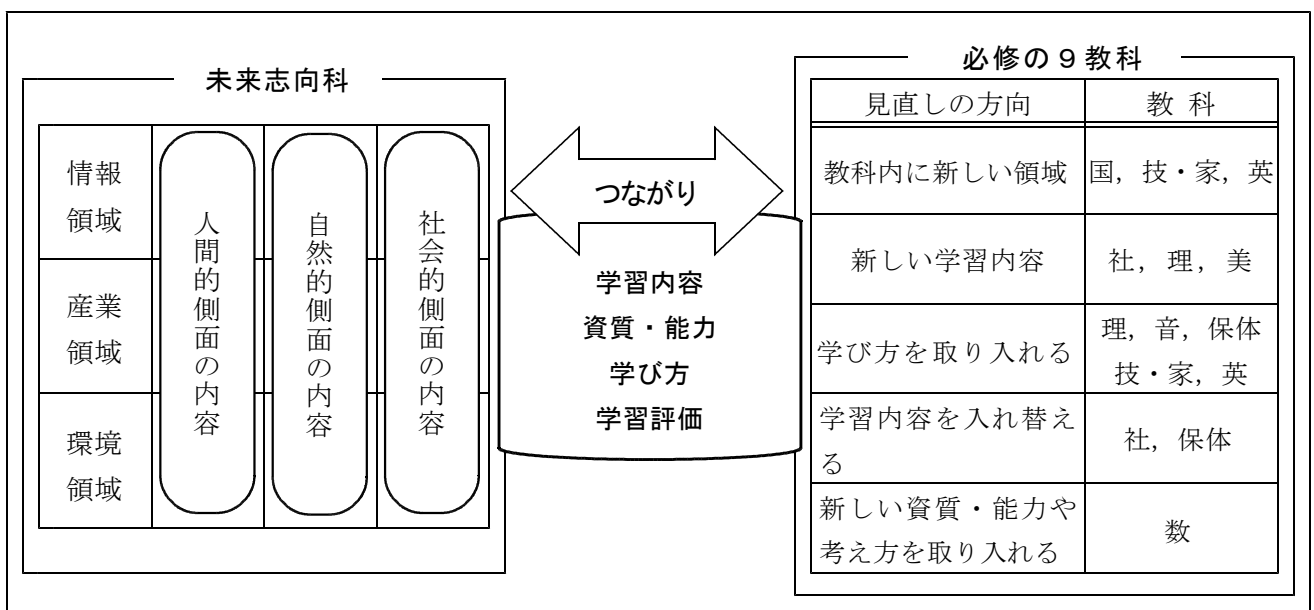
必修の9教科に未来志向科を加え、10教科を必修教科として教育課程を編成する。未来志向科には情報、産業、環境の3つの領域を設立し、それぞれの領域で主に育成する力と5つの重点項目を設定し、人間的側面、自然的側面、社会的側面が強い今日的な課題を学習内容として扱う。未来志向科の学習では、探究する場面が展開されるよう単元を構成し、自らが設定した課題や問題を解決するために必修教科の学習で得た知識や技能を活用する題材を選定する。また、未来志向科と必修の9教科は学習内容、資質・能力、学び方、学習評価の点でつながりを持ち、必修の9教科は教科の特性に応じて未来志向科との関連を図りながら見直しの方向を設定する。未来志向科で育成する力とその重点項目を以下に示す。

	主に育成する力	主に育成する力の重点項目
情報領域	「読解力、表現力」 様々な情報をもとにして、世の中の事象を解釈したり、表現したりする力	A 様々な情報から、目的に応じて適切に情報を抜き出すことができる。 B 情報が多様な意味を持つことを理解したり、推論したりすることができる。 C 異なる考え方を生かし、事象の解釈を深めることができる。 D 解釈した情報を場面に応じて適切に表現したり、説明したりできる。 E 受信者の立場を意識した表現を用いて発信することができる。
産業領域	「思考力、判断力、表現力」 先を見通し、根拠に基づいて筋道を立てて考えたり、目的に応じて判断したりする力	A 先を見通し、原因から結果を予測することができる。 B 物事をより多くの立場や視点から考えて捉えることができる。 C 目的に応じて、様々な見方やアイデアを出すことができる。 D 限られた条件の中で、より適切な判断をすることができる。 E なぜそう判断したのか筋道を立てて理由を述べることができる。
環境領域	「問題解決能力」 自らすすんで問題を発見し、解決にあたっては身に付けた知識や技能を活用することはもとより、必要ならば新たに学習したり他者と協力したりして、よりよい解決策を探る力	A ある事象の中で、問題を発見することができる。 B 既得の力を様々な場面で活用させることができる。 C 既得の力や考えを組み合わせより良い解決策を考えることができる。 D 問題解決にあたり、必要に応じて新たなものを取り入れることができる。 E 問題解決の過程を実生活に生かすことができる。

生徒が、どの領域でも人間的側面、自然的側面、社会的側面の3つの内容を学習し、単元を体系的・系統的に設定する。履修時間は各単元60分授業の7コマで1クールを構成し、3クールにわたって年間を通して実施することから、約75時間である。未来志向科各単元の実施時期と重点項目は以下の通りである。

領域	学年	第1クール（5月～7月）	第2クール（9月～11月）	第3クール（1月～3月）
情報	1年	伝統的な日本文化 (人間 / 重点項目 A, C, E)	メディアの基礎 (社会 / 重点項目 A, B)	災害情報の基礎 (自然 / 重点項目 A, D)
	2年	パンデミック (自然 / 重点項目 A, B, C)	現代的な日本文化 (人間 / 重点項目 B, C)	著作権 (社会 / 重点項目 C, D, E)
	3年	映像メディア (社会 / 重点項目 B, D, E)	地震災害 (自然 / 重点項目 C, D, E)	世界遺産と日本文化 (人間 / 重点項目 A, D, E)
産業	1年	金融のしくみ (社会 / 重点項目 B, E)	ライフスタイルと健康 (人間 / 重点項目 B, E)	未来のエネルギー産業 (自然 / 重点項目 A, C, D)
	2年	食産業と健康 (人間 / 重点項目 A, D, E)	燃料電池と自動車産業 (自然 / 重点項目 B, C, D)	経済設計と金融 (社会 / 重点項目 A, D)
	3年	自作ロケットと宇宙産業 (自然 / 重点項目 C, D, E)	起業と金融 (社会 / 重点項目 A, C, E)	貿易と健康 (人間 / 重点項目 B, C, D)
環境	1年	地球温暖化問題の解決策(家庭・学校) (自然 / 重点項目 A, B, C)	まちづくり（再生資源） (社会 / 重点項目 A, D, E)	バリアフリー (人間 / 重点項目 A, B)
	2年	ユニバーサルデザイン (人間 / 重点項目 A, B, C)	地球温暖化問題の解決策(地域・団体) (自然 / 重点項目 A, C, D)	まちづくり（水資源） (社会 / 重点項目 A, D, E)
	3年	まちづくり（地域資源） (社会 / 重点項目 A, B, C)	ノーマライゼーション (人間 / 重点項目 A, D, E)	地球温暖化問題の解決策(企業・地球) (自然 / 重点項目 A, D, E)

未来志向科と必修の9教科のつながりには、学習内容、学び方、資質・能力、学習評価の4つを視点とする。また、必修の9教科の見直しを「新しい領域を設定する」「新しい学習内容を取り入れる」「学び方を取り入れる」「学習内容を入れ替える」「新しい資質・能力や考え方を取り入れる」の5つの方向に沿って各教科ごとに取り組む。



(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒の実態や生徒を取り巻く環境をふまえて、学校教育目標の確認と目指す生徒像の検討 ○ 総合教科プロジェクト部会の設立 ○ 総合教科で育成する資質・能力の検討および、下位目標の設定 ○ 生徒の実態についてのアンケート調査 ○ 総合教科で扱う今日的な課題を洗い出し、学習内容について検討し、近隣の研究機関との連携についての調査 ○ 総合教科の単元開発および授業実践 ○ 総合教科カリキュラムの試行 ○ 授業実践を終えてのポートフォリオ評価 ○ 各教科において総合教科との連携を重視した学習の開発
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 総合教科「未来志向科」のカリキュラムの見直しと本格的な実施 <ul style="list-style-type: none"> ・未来志向科の学習内容の精選とその系統について学年の発達段階をふまえたものに修正する。 ・1年次の成果と課題をふまえ、育成する資質・能力と学習内容を整理する。 ○ 授業研究の実践と課題の把握とその分析 ○ 生徒の力をとらえるペーパーテストやパフォーマンス課題等の開発 <ul style="list-style-type: none"> ・学習した内容がどの程度身に付いたかを測定するペーパーテストを作成するとともに、資質・能力を測定するためのパフォーマンス課題の開発を行う。 ○ 評価テスト、アンケートをもとに学習者の変容の調査・分析 ○ 実践事例の蓄積と分析を通してのカリキュラム修正
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 未来志向科の学習内容の見直し <ul style="list-style-type: none"> ・未来志向科における学習内容と重点項目を再検討し、修正・改善する。 ○ これまでの研究の実践を通して、指導方法、評価方法の改善 <ul style="list-style-type: none"> ・未来志向科と各教科との関連をふまえ、学年の系統性を持たせた学習内容に改善する。 ・教育課程全体から未来志向科と各教科の在り方を見直す。 ・未来志向科や各教科で育成する学ぶ力（意欲、好奇心、計画、方法、集中力、持続力等）がどの程度身に付いているかを判断するためのアンケートを開発し、実施する。 ○ 生徒の学力をとらえるペーパーテストやパフォーマンス課題等の修正 ○ 研究開発の評価とまとめ <ul style="list-style-type: none"> ・未来志向科を中心とした教育課程の効果を調査・分析する。 ・近隣の学校にアンケートを実施し、意見を幅広く収集し、教育課程の改善につなぐ。 ○ 3年間の研究開発の成果と課題のまとめ <ul style="list-style-type: none"> ・運営指導員会、授業公開を通して、実践の効果を評価する。

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 運営指導委員からの指導・助言 <ul style="list-style-type: none"> ・運営指導委員会を2回（12月，2月）実施する。 ○ 総合教科を実践しての成果と課題の分析，評価方法の検討 ○ 授業研究を通して授業評価及び生徒の変容についての調査分析 <ul style="list-style-type: none"> ・生徒，教員へのアンケートを2回（10月，3月）実施する。 ○ 1年間の取組を振り返り，第1年次の研究成果の評価
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒の学力調査 <ul style="list-style-type: none"> ・ペーパーテストやパフォーマンステストにより評価する。 ○ 運営指導委員からの指導・助言・評価 <ul style="list-style-type: none"> ・運営指導委員会を2回（12月，2月）実施する。 ○ 生徒，保護者，教員へのアンケート調査によりその効果と変容を評価 <ul style="list-style-type: none"> ・アンケートは，生徒，教員，保護者に対して2回（4月，1月）実施する。 ○ 隔年で行われる本校研究発表会で参加者へのアンケート調査により評価 ○ 未来志向科での評価方法を見直し，修正 ○ 2年間の取組を振り返り，第2年次の研究成果の評価
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒の学力調査 <ul style="list-style-type: none"> ・授業実施後に学習内容に関わる知識や技能を測るペーパーテストを実施する。 ・資質・能力面の評価についてはポートフォリオやパフォーマンス課題等により評価する。 ○ 実践事例の分析・検討・評価 <ul style="list-style-type: none"> ・学習内容は適切であったか，教材及び指導方法は適切であったかを評価テストやアンケートをもとに評価する。 ○ 運営指導委員からの指導・助言・評価 <ul style="list-style-type: none"> ・運営指導委員会を2回（9月，12月）実施する。 ○ 本校生徒，他校生徒（附属3校，公立3校），保護者，教員へのアンケート調査により，カリキュラム開発とその改善による効果と変容を評価 <ul style="list-style-type: none"> ・各アンケートは，本校生徒（4月，7月，11月），他校生徒（11月），教員（12月），保護者（7月）に実施する。 ・生徒を対象にしたアンケートの内容については， 「学習に対する資質・能力の自己分析」 「必修の9教科から未来志向科への学びの転移」 「自尊意識」「未来志向科への興味・関心・取組」「学ぶ力」 の各項目において，多面的・継続的・重層的にデータを収集する。 ○ 教科内容見直しのまとめと評価 <ul style="list-style-type: none"> ・教科内容の見直しについてアンケートを実施（11月）し，生徒の意識の変容を探り，学習内容がどのように見直されたかを明らかにする。 ○ 3年間の取組と研究成果のまとめと第3年次の研究成果の評価

5 研究開発の成果

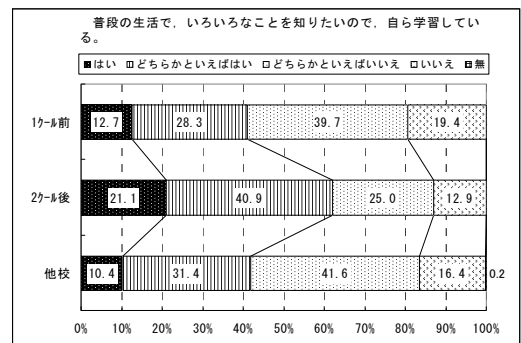
(1) 実施による効果

【生徒への効果】

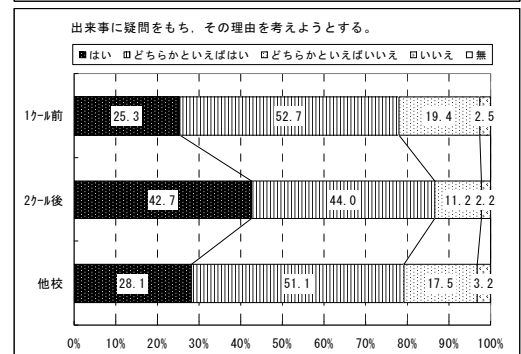
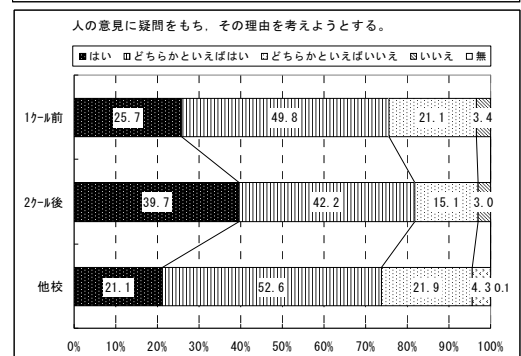
○ 学ぶ力（意欲、好奇心・探究心、方法、持続力等）について

第3年次に本校生徒（第1学年122名、第2学年118名、第3学年120名）に対して、未来志向科を実施する前後（1クール前〔5月〕、2クール後〔11月〕）でアンケート調査を行い、生徒の変容を分析した。また、総合的な学習の時間を未来志向科として教科化したことによる効果を分析するために、従来の総合的な学習の時間を運用している他附属中学校（3校）と近隣の公立中学校（3校）を抽出し、調査を依頼した。グラフにある「他校」は、それら6校（それぞれの学校で各学年2クラスずつ計36クラス）を集計したデータである。必修の9教科における生徒への効果については、紙面の都合上報告書に記載する。

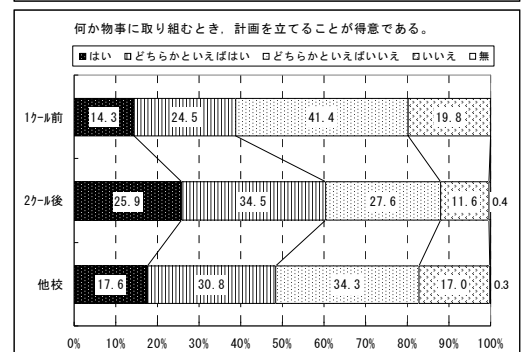
- 学習意欲についての設問「普段の生活で、いろいろなことを知りたいので、自ら学習している」について、肯定的な回答をした生徒が学習の前後で約21ポイント増加し、学習意欲の高まりが見られた。この結果は、学校だけの学習を学びとはとらえず、日常生活での学習全体を学びととらえ、未来志向科で扱う今日的な課題に関心を抱き、意欲的に学習を進めている割合の増加を示している。また、学校間でも差が見られ、学習意欲の高まりを確認できた。



- 好奇心・探究心についての設問「人の意見に疑問をもち、その理由を考えようとする」、「出来事に疑問をもち、その理由を考えようとする」に対して、学習の前後で肯定的な回答を示す生徒の割合が、それぞれ増加した。特に、より強い肯定を示す回答が、それぞれ約14ポイント、約17ポイントと上昇しており、今日的な課題を学習することを通して、また教育課程全体を通して、探究する姿勢が身に付きつつあることを示している。それは、他校との比較からも、一定の成果をみることができる。好奇心・探究心は、学習意欲に関わる要素であるだけでなく、探究型の学習を展開する未来志向科の中では、自ら考え、自ら学ぶ要素として、重要であると考えている。

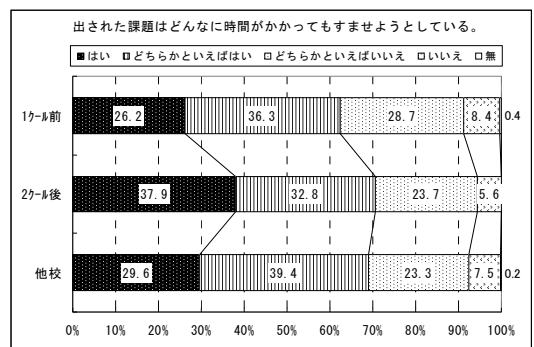
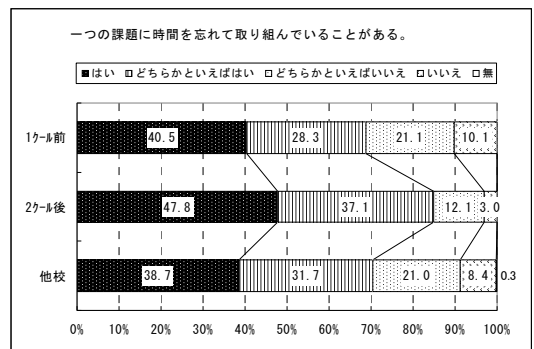
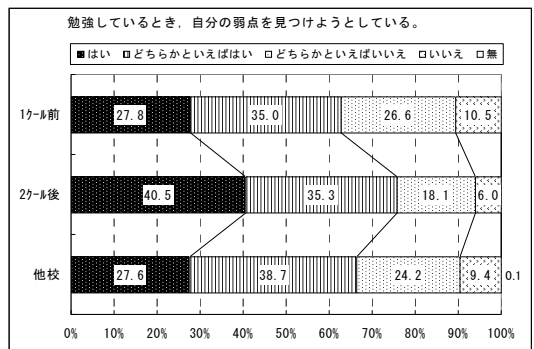
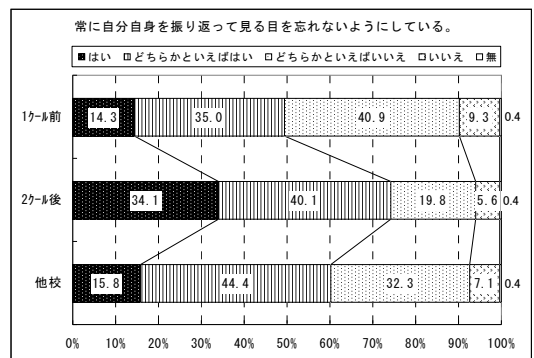


- 計画についての設問「何か物事に取り組むとき、計画を立てることが得意である」では、肯定的な回答をした生徒の割合が、学習の前後で約21ポイント増加した。しかし、同時に約40%の生徒が計画的に学習を進めることが苦手であると感じていることも分かった。他校との比較でも、実施前と実施後で差が見られたことにより、効果があったことが分かる。



- メタ認知的な視点である自分自身を省察する設問「常に自分自身を振り返って見る目を忘れないようにしている」では、肯定的な回答が約24ポイント増加し、強い肯定を示す割合も増加している。これは、学習の場面だけでなく、日常生活の中でも、より良い判断をしようとする態度が身に付きつつあることが分かる。また、設問「勉強しているとき、自分の弱点を見つけようとしている。」に対して、強い肯定を示す回答が増加している。教科学習の中でも、自己の学習方法を改善しながら効果的に学習を進めようとしていることが分かる。
- 集中力についての設問「一つの課題に時間を忘れて取り組んでいることがある」では、肯定的な生徒の割合が約16ポイント増加した。これは、それぞれの生徒の趣向にもよるが、未来志向科の単元の中で、学習内容に興味・関心を抱き、集中して取り組んでいたことがうかがえる。
- 持続力についての設問「出された課題はどんなに時間がかかってもすませようとしている」に関して、強い肯定を示す回答が授業の前後で約9ポイント増加したが、全体として大きな差は見られなかった。未来志向科では、授業時間を60分授業にしたり、パフォーマンス課題やレポート等の課題を意図的に与えたりして、生徒の学習に対する持続力の育成をねらったが、その効果はあまり得られなかったことを示している。

以上のことから、未来志向科の学習を通して、また教育課程全体を通して、学ぶ力の育成を図り、その中でも、意欲、好奇心・探究心、計画、方法などの育成にはある一定の効果を得ることができたが、持続力の育成には課題が残る結果となった。



○ 全国学力・学習状況調査の結果分析から

本教育課程を通して、本校生徒の学力がどう変化したかを全国学力・学習状況調査結果から分析した。本調査の実施時期は4月であることから、本教育課程の効果が表れ始める年度は平成23年度であると考え、平成20年度と本教育課程を1年間実施した平成21年度、2年間実施した平成22年度の生徒を比較しても、大きな変容はみられなかった。

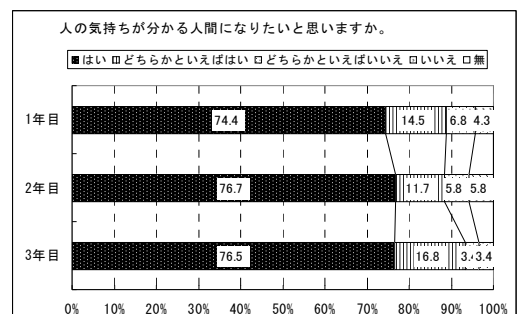
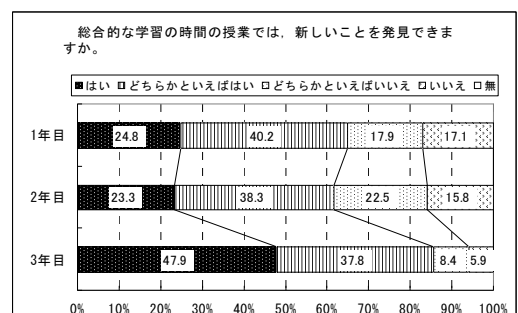
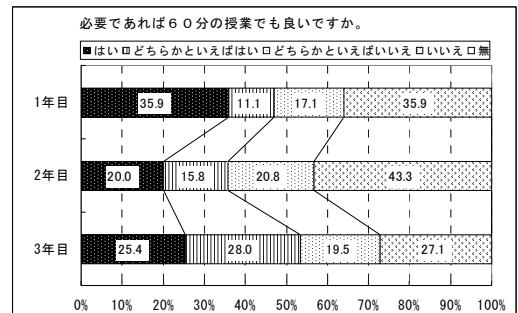
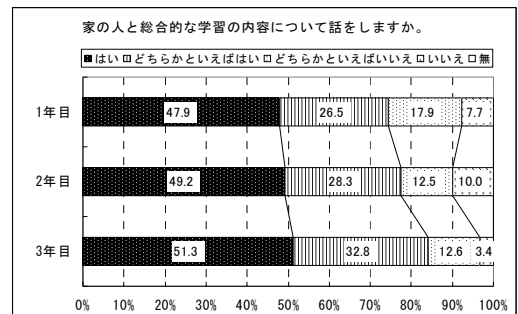
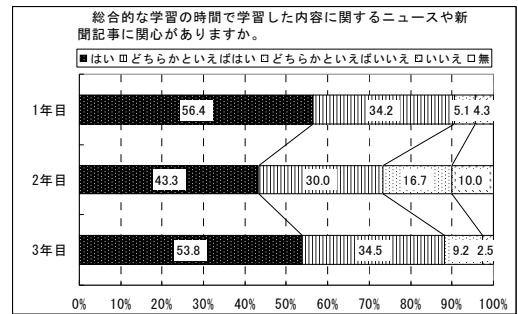
読解力、表現力、思考力・判断力、問題解決能力のような資質・能力の変容については、1～2年間の取組だけで判断することは難しい。また、生徒の学力は、該当学年の生徒の特質に応じて変動する。本教育課程が資質・能力面で生徒にどのような影響を及ぼすかについては、取組を継続した上で、来年度以降の結果も考慮する必要がある。

○ 授業時間や実施方法について

本研究開発1年次に1年生（平成20年度入学）だった全生徒に対して、経年変化をみるために、3年間にわたって毎年、未来志向科を実施した後でアンケート調査を行い、その結果から生徒の変容を分析した。実施時期は、1年目2月、2年目12月、3年目12月である。

- 「総合的な学習の時間（未来志向科）で学習した内容に関するニュースや新聞記事に関心がありますか」について、2年目に肯定的な割合が減少したが、平均して約80%の生徒が肯定的な回答をした。また、「家の人と総合的な学習の時間（未来志向科）の内容について話をしますか」についても肯定的な回答が、経年ごとに増加しており、家庭でも学習内容が話題になる機会が増えていることが分かる。実際、毎日の生活を記録しているノートにも、未来志向科の授業のことで取り上げている生徒が増えている。未来志向科では、今日的な課題を学習内容として取り上げているため、身近にそれらの情報を収集することができ、生徒が興味を持てば、日常生活の中で話題に上る機会が多いことがうかがえる。
- 「必要であれば60分の授業時間でも良いですか」について、肯定的な変容を見せる生徒が増えつつある状態であり、学習に対して負担を感じずに取り組んでいることが分かる。しかし、同時に否定的な生徒が約半数を占めており、単元ごとの授業時数の検討や学習内容の削減を視野に入れた精選が必要であり、今後の課題である。
- 「総合的な学習の時間（未来志向科）では、新しいことを発見できますか」について、肯定的に回答する生徒の割合が著しく増加している。これは、3年間を通して、未来志向科にふさわしくない単元を新しい単元に入れ替えたり、同じ単元でも内容を更新したりした成果だと考えている。2年目から3年目での著しい伸長は、毎年新しいことを学ぶことができたことによる成果と考えている。
- 「人の気持ちが分かる人間になりたいと思いますか」について、3年間を通じて差異は見られないが、常に高い割合を示している。この項目は教育活動全体を通じて、高めていくものであると考えている。

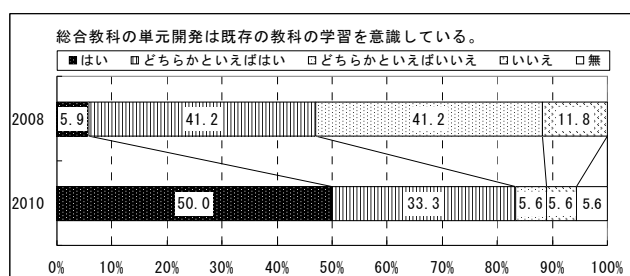
以上のことから、授業時間や実施方法について、その意図を説明する機会を設けるとともに、生徒が負担を感じないような未来志向科の運用を目指していかなければならない。



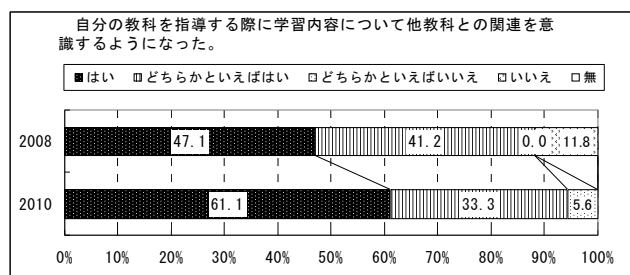
【教師への効果】

本校教員（18名）に対して、未来志向科の運用や専門教科の取組に関するアンケート調査を1年次（3月）と3年次（12月）に行った。下のグラフは、異動により1年次と3年次では顔ぶれが異なるが、2つのアンケート結果を示している。

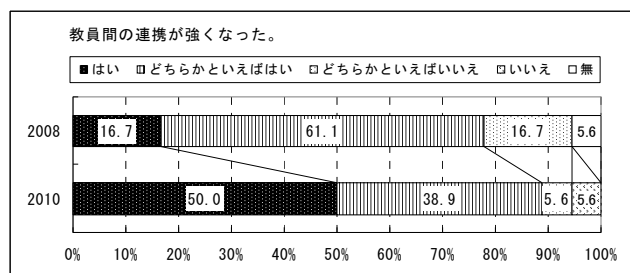
○「総合教科の単元開発は既存の教科の学習を意識している」について、多くの教員が未来志向科と必修の9教科とのつながりや系統性を意識して授業実践を行っている」と回答した。これは、未来志向科の目標や学習内容を学習指導要領の示し方に倣って作成し、その共通理解のもと授業実践を行ったからであると考えている。



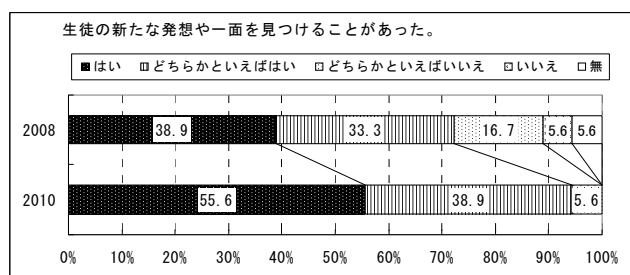
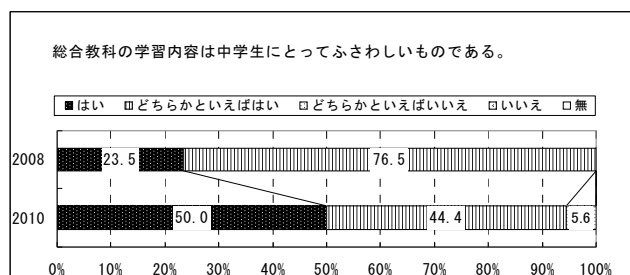
○「自分の教科を指導する際に学習内容について他教科との関連を意識するようになった」について、ほとんどの教員が専門教科だけでなく、必修の9教科との関連性を念頭に置いて教材研究を行っている」と回答した。コメントとして、「他教科の学習指導要領を見るようになり、専門教科の意義を意識するようになった」、「新聞やニュース、本などから常に今日的な課題を探り、知識が増えた」という教員もおり、教科の在り方について高い意識をもつようになったことがわかる。また、研究開発だけでなく、様々な学校運営においても教員の連携が強くなったことが分かる。



○「総合教科の学習内容は中学生にとってふさわしいものである」について、教員の90%以上が肯定的な回答をしているが、その約半数が弱い肯定となっている。これは、未来志向科の学習内容が高校の内容を扱ったり、総合的な知識を必要としたりするため、学習内容の難易度を精査する必要があることを示している。



○「生徒の新たな発想や一面を見つけることがあった」について、ほとんどの教師が、専門教科での生徒の姿と未来志向科での生徒の姿に違いがあることを認識しており、生徒を多面的にみるようになったことがうかがえる。

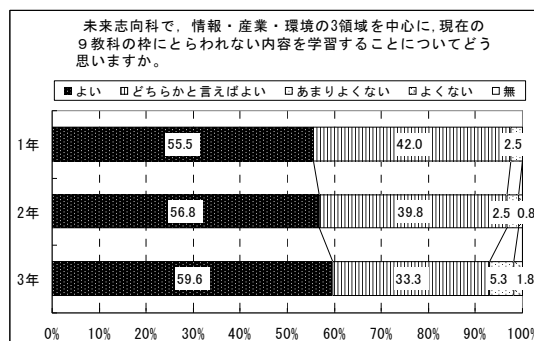


以上のことから、本校教員は、未来志向科の開発のために、新しい知識や今日的な課題を積極的に得ようとしたことや、専門教科についても、他教科との連携を考え、積極的に見直そうとしたことがうかがえる。

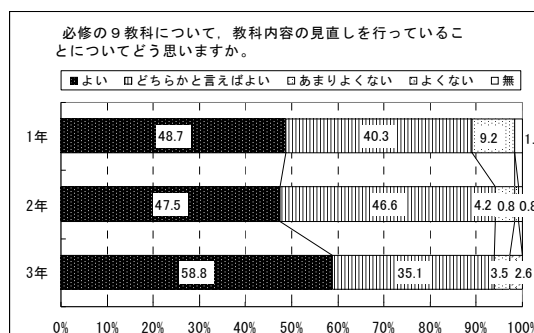
【保護者等への効果】

本校保護者（第1学年119名，第2学年117名，第3学年114名）に対し，3年次（7月）に未来志向科の運用や必修の9教科の見直しについてのアンケート調査を行った。

○「未来志向科で，情報・産業・環境の3領域を中心に，現在の9教科の枠にとられない内容を学習することについてどう思いますか」について約90%以上が肯定的な回答を示した。これは，保護者もこれからの時代に情報・産業・環境に関することを学習することが必要であると考えていることを示している。



○「必修の9教科について，教科内容の見直しを行っていることについてどう思いますか」について，約90%が肯定的な回答であった。これは，未来志向科と必修の9教科とのつながりを意識しながら，教育課程を再編することに理解があることを示している。また，パンフレットを制作・配布し，保護者や近隣学校への啓発活動を積極的に行い，研究発表や授業参観での公開授業を通して，指導の実際を提供した成果も表れている。



○保護者の自由記述の欄では，研究開発の意図を理解した上で肯定的な回答を示す保護者が多かった。しかし，高校受験に対する不安感を抱く保護者も見受けられた。

〔保護者による自由記述〕

- ・世の中の変化に対応して教科内容を見直すことは必要である。
- ・家庭でもニュースを見ていて話題に対し，内容を理解し，私たちと意見を交わせるようになりました。日本だけでなく世界レベルでも物事について考えようとしています。世の中に対する視野がかなり広がったと思います。
- ・暗記重視の学習から進化するイメージで，どちらかといえば良いと感じますが，全学校が変わらない状態では，高校受験等にどのような影響が出るか不明瞭で少し不安があります。

○2つのグラフから分かるように，学年進行とともに少しずつではあるが，強い肯定を示す回答の割合が高くなっている。これは，学習を進めるにつれ，生徒だけでなく，保護者にも未来志向科に対する関心と理解が高くなっていることを示している。

（2）研究実施上の問題点と今後の課題

○本研究開発は平成20年度から3年間にわたり実施した。同時に，新学習指導要領の移行期間が平成21年度から始まったことにより，現行の学習指導要領で教育課程の特例を得ていたが，年度が進行するにつれ，新学習指導要領での教育課程の特例も考えていく必要が生まれた。本研究の成果を新学習指導要領の教育課程にどう対応させ，発展させていくかが今後の課題である。

○未来志向科に情報，産業，環境の3つの領域を位置付け，今日的な課題を学習内容としてこれからの時代に必要な資質・能力を育成した。前期中等教育という枠の中で，ある一定の成果を得ることはできたが，初等教育と後期中等教育との接続を視野に入れた長期的なスパンで実践した場合，さらに大きな成果を得ることができると考えている。実際，小学校では環境教育，高等学校では情報教育や産業教育（工業高校等）などがある。小中高の接続を視野に入れ，体系的・系統的に異校種間の教育課程を考えることで，育成すべき資質・能力と学習内容をより効果的に身に付けることができると考える。

香川大学教育学部附属高松中学校 教育課程表（平成22年度）

		各教科の授業時数									人間・道徳	特別活動	選択教科	総合的な学習の時間	未来志向科	総授業数
		国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	英語						
第1学年	標準	140	105	140	105	45	45	90	70	105	35	35	65		—	980
	本校	140	105	140	105	45	45	90	70	105	60	35	0	0	75	1015
	増減	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25	0	-65		75	35
第2学年	標準	105	105	105	140	35	35	90	70	105	35	35	120		—	980
	本校	115	115	115	140	45	45	90	70	115	55	35	0	0	75	1015
	増減	10	10	10	0	10	10	0	0	10	20	0	-120		75	35
第3学年	標準	105	85	140	105	35	35	90	35	105	35	35	175		—	980
	本校	105	105	140	105	45	45	90	70	115	50	35	35	0	75	1015
	増減	0	20	0	0	10	10	0	35	10	15	0	-140		75	35